

### 内部被ばく検査結果通知診療場面における医師による説明

#### ——医療場面におけるケア実践の相互行為分析——

日本学術振興会／千葉大学 黒嶋智美

#### 1. 目的

本研究の目的は、福島県第一原発爆発事故以降、内部被ばく検査をした来院者に、医師が検査結果を「説明する」場面の相互行為の仕組みを明らかにし、得られた知見によって、診療場面におけるケア実践のひとつの方法を明らかにすることである。医師は来院者と初めて顔を合わせ、慎重に、検査結果とその詳細を説明していく。このような説明は、医師と来院者が、説明することを診療全体構造への志向性によって予示し、そのための機会を確保・用意しながら、様々な資源によって達成している社会的行為である。本研究では、医師による説明がどのようになされているのかを明らかにし、本場面に固有のケア実践を検討していく。

#### 2. 方法

本研究では、内部被ばく検査の結果通知場面での医師と来院者の相互行為約 4 時間の映像と、そのやりとりを会話分析の転記方法で詳細に文字化したトランスクリプトをデータとして、会話分析の手法を使って分析する。検査結果を知らせる行為を医師がどのような発話デザインと相互行為上の位置で行っているのか、また医師によって志向されるこのようなやり方をケア実践の観点から議論する。

#### 3. 結果

まず、診療の冒頭で、医師は結果から通知することを前置きとして提示し全体構造を示す。そして事実のみの報告として通知を行なうことで、それが次に敷衍されていくことを予示する。説明では、放射性カリウムの検出結果が言及されると、その正常性を強調するような言い方がなされる。たとえば、「人間だったら」や「絶対」などの不可避性や、極端な状態を表わす強調表現の使用である。極端な状態を表わす表現は、日常的に使う言語資源であり、それによって話し手は自分の意見を納得させたり正当化したりする (Pomerantz, 1986)。それによって、カリウムの検出量の正常性は相手からの納得を必要とするものとして提示されている。もう一つの言語的資源は、「って」や「と」という引用標識で、内部被ばく数値の否定的解釈 (値が低いこと) を提示する際に用いられている。引用標識が日常会話で自分の経験を語る際に用いられる場合、経験を「報告されることから」とし、話し手自らを「報告者」と位置づけ自身の経験から距離を取る (Hayashi, 1997)。同様に、引用標識を用いて検査結果の解釈を提示することで、その解釈が、医師自身の見解/判断でありながら、医師がコミットする態度を避け、「一般的な誰でも」持ちうる解釈として「報告」する形を取っている。

#### 4. 結論

医師による説明の中で、放射性カリウムの正常性の強調と、内部被ばくの否定的解釈の提示に対するコミットメントの軽減が、言語的資源によって達成されていた。医師は、日常的な特定のやり方を診療場面に利用することで、発話内容に対して負いうるコミットメントの度合いを医師として持つ権限という観点から測り、またそれによって憂慮されうることから敏感に配慮を示しているといえるだろう。

#### 文献

Hayashi, M. (1997). An exploration of sentence-final uses of the quotative particle in Japanese spoken discourse. *Japanese/Korean Linguistics* 6, 565-581.

Pomerantz, A. (1986). Extreme case formulations: A way of legitimizing claims. *Human Studies* 9, 219-229.